

〔特別寄稿〕

## 藍野学院紀要の改革

堺 俊 明\*

藍野学院短期大学は 1985 年（昭和 60 年）に設立され、その 2 年後の 1987 年には藍野学院紀要第 1 号が発行されて、今年で 20 周年を迎えることとなった。発刊 20 周年を記念して藍野学院紀要にかかわる記事を書くように依頼されたので、私の関係した 7 年間のことを思い出しながら筆をとることにした。

### 1 藍野学院紀要編集委員長を引き受けて

学長就任時、それまでに発行されてきた藍野学院紀要の 12 巻までを一見してまず驚いたのは、掲載論文の中に投稿規定を全く無視した、長編の論文が掲載されていたことである。さらに、掲載論文の中には学術論文としてのスタイルが無視されていて大変読み辛く、およそ学術論文とは似て非なるものがあった。また、参考文献を多数列挙しているのに、先行研究等の引用が少なく、従って考察も不十分であった。

また査読は教員同士で行なっていたので、査読者の意見に対して投稿者が感情的になり、そのため、一部の論文は投稿を取り下げしまったと聞いている。また、校正の段階で論文を大幅に変更する人がいるなど、研究者としておよそ常識では考えられないことが行なわれていた。このことは藍野学院紀要に限られたことでなく他の看護系大学紀要にも共通していたことと考えられる。

従って川口<sup>1)</sup>は“看護大学紀要は看護学発展に寄与出来るのか”との題名の論文を発表し、その中で看護系大学紀要の必要性について否定的な意見を述べている。しかし、われわれ<sup>2)</sup>は“紀要について”の論説の中で、大学院に学ぶ機会のなかった高等教育機関の教

員にとって、紀要は貴重な研究発表雑誌であり、研究訓練機構ともなる、と考えていた。

そこで、私が就任以来、自ら編集委員長を引き受け、第 12 巻（1998）の論文が投稿されてきた段階から厳しくチェックすることにした。すなわちこれまでの藍野学院紀要への投稿論文は形式的にも科学論文といい難いため、顧問の大阪市立大学増田芳雄名誉教授にお願いして、何とか査読に耐えられるような論文にして貰うことにした。そのため、約半年の年月をかけて繰り返し指導していただき、ほとんど全ての投稿論文を 10 回近く著者へ書き直してもらい、やっと査読に耐えられるような科学論文に仕上げることができた。このように血の滲む様な指導の結果、看護教員に論文を書く作法を学んで貰うことができた。

なお投稿者を教員だけでなく、専攻科学生や看護学生にも広げた。私は毎年短期大学の入学式の際、学生に対し“高等学校では教員から教わるものであるが、大学では自ら学ぶものである”と繰り返し説いてきた。そして一部の能力のある専攻科学生や看護学生にも研究への参加を呼びかけたところ、看護学生は夏休みを利用して資料を集め、また専攻科学生は保健所実習で得られたデータを整理して論文を作成した。これらの研究論文が投稿できたのは、一重に野村公寿教授、中野博重教授、蛭田由美教授、足利学助教授らの指導の結果である。第 15 巻（2001）には専攻科学生が英文論文 2 編を、また第 17 巻（2003）には看護学科 3 回生が和文 2 編、専攻科学生が和文 3 編の論文を投稿した。このことは学生にとっては勿論のこと、また大学教育にとっても、“大学では自ら積極的に学ぶ”という意味で意義のあることであったと考えられる。

\* 藍野学院短期大学名誉教授

次に、査読に回せるように仕上がった投稿論文は、複数の査読者により厳しい査読が行われた。堺ら<sup>2)</sup>は“紀要の価値は厳しい査読がなされているか否かによって決まる”と考えていた。そこで査読者として、主に藍野グループに属する医学部出身の名誉教授の先生方をお願いした。これらの先生方の査読により投稿者は大いに教えられた。堺ら<sup>2)</sup>は“査読の過程で、査読者と投稿者との間には、論文を介して多くの人間的な触れ合いがあり、また研究のあり方などについて指導することが出来、査読者、投稿者いずれにとっても裨益することが多かったと考えられる”と報告している。このような厳しいが、しかし暖かい指導によって何とか世間に出しても恥ずかしくない論文が出来上がった。これを機会に雑誌のサイズを旧版のB5版から現代風のA4版に改定し、表紙のデザインも大幅に変更した。さらに論文には英文抄録を付けることにした。なお、日本語の論文の表現の問題については、句読点に至るまで細部に亘って野村公寿教授の協力を得て、文章的にも適切な論文を作成することが出来た。

## 2 AINO JOURNALの発行について

教員にも研究論文は和文論文だけでなく、英文論文として発表するように勧めていたところ、次第に英文論文が沢山投稿されるようになった。そして、藍野学院紀要15巻(2001)には投稿論文16編のうち半分の8編が英文論文として投稿された。そこで藍野学院の小山昭夫理事長に相談した結果、藍野学院紀要を和文論文のみに特化し、英文論文のために新たな英文雑誌“AINO JOURNAL”を2002年から創刊し、毎年発行することにした。AINO JOURNALの発行に際しては、国際雑誌編集の経験豊かな増田芳雄教授(日本植物生理学会英文雑誌編集委員長)に、一方ならぬご指導を頂いた。また英文論文については、ネイティブスピーカーで、その道の権威である野口ジュディー<sup>3)</sup>先生に一方ならぬご指導をお願いし、完全な英文の論文を作成することが出来た。このように藍野学院紀要に投稿される論文の数が増え、また論文の質が向上しただけでなく、さらに英文専用のAINO JOURNALが発行出来るようになったことは藍野学院にとっても、また編集委員にとっても喜ばしいことであった。多くの教員は論文を書く意欲を持っている。ただその能力を引き出し、それを論文にして発表することを指導するものがいなかったに過ぎないと考えられる。

藍野大学設立認可の際、短期大学で英文雑誌を発行

しているのは藍野学院短期大学だけであるとお褒めの言葉を頂いたと聞いている。皆様の努力が報われて嬉しい限りである。

なお、AINO JOURNALとは別に、蛭田由美<sup>4)</sup>教授の論文がイギリスの国際看護雑誌 Brit J Midwifery に投稿し、掲載されたのは喜ばしいことである。

以下に、藍野学院紀要の改革と若干関係のある事項について触れておく。

## 3 アメリカの看護研究雑誌“Nursing Research”を読んで

私は藍野学院紀要編集委員長として、日本の看護学雑誌のほか世界の看護学雑誌のレベルについても知っておかなければならないと考えていた。看護論文のなかでも“日本看護科学雑誌”などには優秀な論文が掲載されている。しかしその他の、特に精神科関係の看護雑誌を見るとその内容は未だ十分とはいえないように思われた。

また聞くところによると、日本の看護の代表的な研究者の多くはアメリカに留学し、アメリカの看護学を学んで帰国し、それをわが国に伝えている。従ってアメリカの看護は世界でも先進的なものと考えられている。そこで藍野大学の図書館で購入しているアメリカの代表的な看護研究雑誌“Nursing Research”の各号に掲載されているDowns 女史のEditorialを増田教授に纏めてもらい、その要約を藍野学院紀要に投稿した<sup>5)</sup>。Downs 女史はアメリカの看護師はもっと系統的な研究を行い、看護以外の分野の論文に引けを取らないような論文を書くようにと、繰り返し、口をすっぱくして述べており、アメリカの看護研究も未だ完全なレベルに達していないことがわかった。さらに女史は“看護研究は看護師のためだけでなく、患者自身のためである”と述べており、その言葉が非常に印象的であった。いま私<sup>6)</sup>はある施設で、看護研究の指導、ことに認知症の学習療法の指導を行っているが、この研究を通じて看護者の意識が改革され、また認知症の患者の症状も改善されたのを実感しているところである。

## 4 看護学研究奨励賞の創設および選考委員長への就任して

私は日本私立看護系大学協会において平成10年か

ら理事に選出され、3期6年間務めた。担当は看護教育と看護研究であったが、私は主として看護研究に力を注いだ。このことは藍野学院短期大学の看護研究しか知らない私にとっては全国の私立看護系大学の研究のレベルを知る良い機会になった。聖路加看護大学のような一部の大学を除いた他の大学の看護研究レベルは、藍野学院短期大学とほぼ同じ程度のものであることを知り、少し安心した。

そこで私はわが国の私立看護系大学における看護研究の向上を目指して、看護研究奨励賞の創設を提案し、年間300万円の予算を計上して貰った。受賞対象は、1) 前年度発表の優秀看護論文、2) 若手研究者に対する研究助成金の援助、3) 国際学会へ出席し発表するための助成の3つである。そして提案者である私が看護研究奨励賞の選考委員長に選ばれた。応募の多くは聖路加看護大学からのものであり、同大学の研究のレベルの高さが窺えた。今後この賞を目指して多くの優れた看護研究者が出てくると、この機会に看護学研究が向上することを期待している。

## 5 藍野学院短期大学の改革について

藍野学院短期大学学長就任以来まず気になったのが上述の紀要の問題で、次いで大学の組織図であった。一般の大学、ことに医学系の大学では教授会が最高決議機関になっている。しかし藍野学院短期大学では実質的には議題は教員会議で議決し、教授会がそれを承認するような形になっていた。さらに学長は組織図の上からは外されていた。そこで思い切って大学の組織図の改正を行い、全ての組織を学長の指揮下に置き、看護研究の指導だけでなく、全教員の指導、監督、さらに看護師の国家試験合格率の向上などにも力を注いだ。

第3に気になったのは財政問題である。藍野学院短期大学は開学以来毎年1億円の赤字を抱え、累積赤字は十数億円にのぼり、他の施設の補助でカバーしていた。新たに藍野大学の設立の申請するためには赤字経営では設立の許可が出ない。何とか黒字経営にしなければならぬというのが学長に課せられた課題であった。そのためには当然人件費の圧縮が必要であった。

当時各地に看護系大学の新設が相次ぎ、多くの教員がそちらに引き抜かれ、また定年退職者や病気で亡くなる人もあり、かなりの教員が移動した。そこで欠員教員の補充に際し、非看護系の常勤の教授は原則として不補充とし、非常勤教員をこれに当てた。さらに看護教員も2名のうち1名は常勤の教授を当て、1名は非常勤講師ないし助手を当てて、常勤教員の数を減らしたが、その際看護教育には支障のないように配慮した。そのため大野知代学科長には一方ならぬご苦勞をお掛けしたが、お陰で経営は黒字になり、藍野大学の設立も認可された。

## 6 おわりに

振り返ってみると学長就任当時藍野学院短期大学では問題が山積していた。そこで最初に手がけたのが藍野学院紀要の改革であった。紀要が改善され、また自分たちの論文が次々に出来上がり、また国際雑誌を含めて色々な雑誌に掲載されるのを見て、教員達の意識改革が起こり、その結果問題であった多くの課題を改革することが出来、何とか学長の責任を果たすことが出来た。これも藍野学院紀要の改革が出来たことと、協力頂いた教員のお陰と考えている。

### 引用文献

- 1) 川口貞親. 看護大学紀要は看護学発展に貢献できるのか? 看護教育 1999;40:60-3.
- 2) 堺俊明, 増田芳雄. 紀要について. 藍野学院紀要 1999;13:91-3.
- 3) 野口ジュディー, 松浦克美著. Judy先生の英語科学論文の書き方. 東京. 講談社; 2000.
- 4) Hiruta Y. A survey of maternity care in practice in Japan. Brit J Midwifery 2003;11:38-42
- 5) 増田芳雄, 堺俊明. 看護学雑誌 nursing Research (RR)の編集長 Florence S. Downs博士による“Editorial”から見たアメリカにおける看護学, 看護研究の実状について. 藍野学院紀要 2000;14:101-19.
- 6) 堺俊明, 垣之内静子, 宮武明, 上西裕之, 村岡祐美, 魚橋武司. 看護研究による看護師の質の向上を目指して. 藍野学院紀要 2005;19:109-14.